

昭和41年12月25日 発行

犯罪蒐集狂

著 者 高 木 彬 光

発行者 矢 貴 東 司

印刷者 北 山 茂

¥270.

発行所 株式会社 桃 源 社

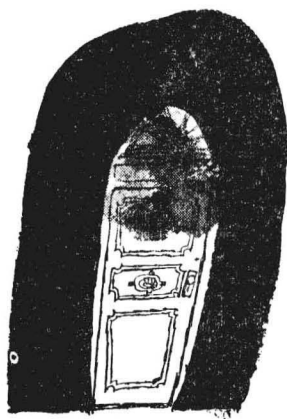
東京都中央区日本橋蛸割町1-12

電話 (666) 4001~2 番

振替東京64351 番

落丁・乱丁の節はお取替え致します

1956 ©



犯罪蒐集狂

高木彬光

<ポピュラー・ブックス>

挿絵 装幀

長尾 J
みの A
の C
る

目次

犯罪蒐集狂	七
顔のない女	四
七つの顔を持つ女	八
無名の手紙	一六
殺意	一八
死刑執行人	二〇

犯罪蒐集狂

犯罪蒐集狂

——また、あの人。

池田和子は眉をひそめた。

午後六時、閉店をあと三十分に控えた一番忙しい時刻、それを一分一秒違えずに、またこの男は彼女の前へ姿をあらわしたのだ。

どこの誰か、もちろん名前前はわからない、年はいわゆる男の厄年の四十二前後だろう。眼は鋭く、体つきはスポーツマンのようにながしりとしていたが、その全身からは、何ともとえようのない、暗い病的な体臭が発散しているようだった。

今日はその表情も特にきびしく暗かった。和子は一目見ただけで、全身にぬるぬるした軟体動物がはいまわっているようなぶきみな感じに襲われたが、お客を選び好みするような権利は、丸

福デパートの女店員たるものには到底許されることではなかった。

「いらっしやいませ、何をさし上げましょう」

和子は無理に笑いを作ると、

——サービス第一、愛嬌第一。

という社訓をかみしめて、その男の前へ近づいて行つた。

「スリッパを見せてもらえないかね？」

またしても同じ注文だった。

この男はスリッパというものに、全身のあらゆる情熱を傾けつくしているようだった。スリッパに恋をしているようだった。

初めて、彼女の前に姿をあらわしてから、今日で一月近くになる。毎日こうして、同じ時刻に同じエレベーターの方角からあらわれて来ては、きまってスリッパを注文し、五六足から十五六足、手にとって見てはためつすがめつし、恋人の肌でも愛撫するように、それにさわって溜息をつき、そのうち二三足を足につっかけて見ては、色とかはき心地に物言いをつけ、三十分も真剣にそういうことをくりかえして、閉店のベルが鳴りわたるころ、やっと一足買つては帰って行くのだった。

「今日はどんなのがよろしゅうございましょうか？」

そう聞くのが、和子としては、精いっぱいの皮肉であり、抵抗であったが、男の方はべつに気にする様子もなく、

「そうだね。昨日もらったのは、少し色が地味だった。もう少し派手なやつにしてみたらかな」と、何の感情もまじえない淡々とした調子でいった。

「はい、ただいま」

スリッパ一足でも客は客、お客にはどのような無理をいわれても、さからってはならないというのが女店員の悲しい宿命だった。

五六足、手あたりしだいに相手の前にならべながら、和子はこの間からこの男のまき起したいろんな影響を頭に思いうかべていた。

最初の二三日はともかく、一月近くもこういうことが続いては、いかに忙しいデパートでも、この男のことは話題に上らないではいなかった。

「きっと、あの人、あなたに気があるのよ。思いのたけをうちあけられないで、スリッパ一足ずつで気をまぎらせているのよ。こんなにドライドライな世の中で、何とまあ、純情な男もあつたものじゃない？」

いつか、同僚の久坂佳枝にそういわれて、和子もぶんぶんしたことがある。

「まさか！」

「だって、宣伝課長の大下さんね。あの人にだって、こんなエピソードがあるというわ。あんな謹厳な人なのに、学生当時、いまの奥さんに猛烈な熱をあげたのね。ちょうど戦争中で、奥さんの方もどこかの銀行の窓口につとめていたらしいのよ。それをねらって大下さんったら、毎日午前中に五円預けちゃ、午後になるとひき出し、そんなことをくりかえしていたらしいのよ。毎日毎日それだから、奥さんの方だっておやと思うでしょう。そのうちに、銀行の帰りにどこかで待っていて、結局結婚へゴールインということになったらしいわ。そのうちに、あなたも帰りを待ち伏せされて……」

「いやらしい。そんな話はもうよして！」

和子は真赤になってしまつて、逃げ出すように相手のそばから離れてしまった。

そうかと思うと、寺島健夫という売場主任からはこういうことをいわれたこともある。

「ねえ、池田君、君のところへは、毎日きまつた時間に妙な男がやって来るようだが、何か怪しいことはないかね？」

「べつにありませんが、何か？」

和子が真赤になってたずね返すと、寺島健夫は首をかしげて、

「久坂君からその話を聞いたんで、僕もそれとなく注意していたんだ。こっちは逆に万引か、それともこっちの売上を調べようとするほかのデパートの廻し者じゃないかと思つてね。たしかに



眼つきは鋭いが、いまのところは、べつに不審な点も見えなかった。君なら何か気がついたかと思つてね……」

そういう話を、和子はスリッパをならべながら、ふと頭に思いうかべていた。

今日もこの男の態度は、いつもと何の変りもなかった。何足も何足も手にとってさすっては溜息をつき、その一足を選んで椅子に腰をかけ、はき心地をためしていた。

「君、この爪先つまさきのあたりがちよつと窮屈なようだが……」

「それでしうか？」

和子は、男の足もとに身をかがめた。

その瞬間——首すじから襟のあたりに、ぱつと生あたたかいねばっこい液体がぶちまけられたような気がした。はっと思つて立ち上ろうとしたとき、男が上から和子の体にもたれかかって来た。

「何を、何をなさるんです！」

いかに無抵抗主義で鍛錬されている女店員にも、これをはねのけるぐらいの基本的人權はあった。力まかせに、男の体をつきとばすと、男はそのまま床に倒れた。だが、和子は自分の手をながめ、床の上を見つめて呆然としてしまった。

白い両手をそめているのも、美しい大理石の床を汚しているものも、真紅の血潮——まだ生あ

たたかい血潮ではなかったか。

「誰か、誰か、誰か来て！」

和子は狂ったような叫びをあげた。ほかのお客に應對していた仲間も、レジスターのところに立っていた売場主任も、あわててその場へかけよって来た。

「どうした？ いったいどうしたんだ？」

「このお客さんが血を吐いて……」

和子にも、その時はまだ事件の真相が分つてはいなかった。主任も小首をかしげながら、

「咯血かな。もし、もし、お客さま……」

と男の体を抱き起しながら、思わずあつと声をあげた。

歌舞伎の殺し場のように、男の顔はいつの間にか、石榴ざくろを割ったような血みどろな形相ぎしやうに変わっていた。こういうことには場なれのしていない主任には、どうしてこういうことになったか、その理由もはつきりつかめないようだった。

「薬……水……いや、医者だ！」

「どうしたんだね？」

その時、人ごみをかきわけて、この場へ近づいて来た三十五六の男があった。精悍な鬚志のあふれる男性的な容貌だったが、まるで鷲のように鋭い眼を光らせ、

「もう死んでいる。薬だの医者だのさわいでも手おくれだ」

と吐き出すようにいった。

この男の確信に満ちた態度に恐れをなした売場主任は、

「でも、どうしてなくなられたのでしょうか。咯血か、それとも吐血か何かでしょうか？」
とうかがいをたてた。

「そんなのではない。これはりっぱな殺人だよ」

「殺人？」

「見たまえ。この弾痕に気がつかないかね？」

男の指さした死体の顔を見なおして、売場主任もあつと叫んだ。

たしかに額の中央には、ぽかりと大豆大ぐらいの穴があいている。吹き出す血潮は口からでもなく、鼻からでもなく、この弾痕が源だった……

クリスマスの大売り出しが始まったばかりだというのに、この混雑をきわめるデパートの中で、ピストルを使って人を殺すというのは、たしかに大胆、しかも不敵な殺人だった。

売場主任もわれを忘れて、次の処置に対する判断さえ出来ず、だまって呆然と立ちつくしていた。

「君、何をぐずぐずしているんだ。早く警視庁なり警察なりへ、このことを知らせたまえ」

男の言葉と、その時ひびきわたった閉店のベルがようやく主任をわれに帰らせた。

和子に、すぐ上役にこのことを知らせて来るように命令すると、彼はもう一度、死体と男の顔を交互に見つめた。

「弾痕のそばに火薬のあとがないから、至近距離からの射撃ではない。そうだとすると、どのあたりかな？ この混雑の中で、もしこの男をねらってここにあてたとすれば大変な腕前だ」

まるで専門の警察官のような言葉が、主任の胸に一種の疑惑をよび起した。

「お客さま、おたくさまはいたい……」

「僕か？ 僕は犯罪のマニアだ。といって、この男を殺した犯人ではないよ」

男はかすかな笑いとともにも名のりをあげた。

「私立探偵、大前田英策——」

二

閉店と同時に、ほかのお客は雪崩のように方々の出入口からおし出されてしまったが、この一階の売場の一角にだけは、新たに集って来た人々が時ならない混乱を見せていた。

その大半は、警視庁や最寄の警察署からかけつけて来た係官たち、残りは最初の発見者たちと店の責任者たちだった。